

あらためて失調症を知る

特集にあたって

「今、問題視しているそれは現象であり結果だよね、その背景には何があるの？」

OTとして臨床現場に立ってから、数えきれないぐらい上司から上記のような指導をいただいた。今ではそれを後輩に問いかける役回りが多くなったが、本特集の原稿作成にあたって査読を依頼すると、恥ずかしながらいまだに同じ指導をいただいた始末である。

とかく、人は今見えている現象にとらわれやすい。

本特集のテーマである失調とは“ある機能が調節を失うこと”とされており、一般的に小脳性・脊髄性・前庭性・末梢神経性に大別され、それぞれの障害部位によって失調症のメカニズムや症状等は変わってくるとされている。

しかし、若いセラピストにとっては、それらの運動学的・神経学的背景に基づいた臨床推論が培われないまま、「手足が揺れる」、「体幹が不安定」、「距離感がつかめない」といった特徴的な現象に追われ、日々の臨床に苦慮しているのではないだろうか。

あらためて物事を知ることとはその背景に目を向けることであり、その背景を知るとは物事への造詣を深め、そこから新たなアプローチの発見につながるはずである。

皆さんが本特集を読み終えたときに、あらためて失調症の病態と特徴の理解が深まり、評価から治療介入・生活支援までの作業療法アプローチの幅が広がるきっかけとなることを期待したい。

(宇野正顕)

企画担当

宇野正顕（甲西リハビリ病院、作業療法士）

江藤文夫（国立障害者リハビリテーションセンター、元総長・医師）

山本伸一（山梨リハビリテーション病院、作業療法士）